古典授業の一方法

―― 作品通読の方法について ――

高　瀬　　允

はじめに

国語科の性質からみて教育課程の改革が行われるごとに少しずつは変るが大きな変革はなかったのが今までの実情であるが，今後の方向を考えると現状のままで良いという意見はおそらく少ないであろう。指導要領に盛りこまれる総花式・抽象表現では解決できない問題を現場の教師は常にかかえている。もっと具体的な問題が問題なのだ。たとえばこれは国語科の教師にかぎらないが，良い教材はすぐに自分の判断で教室に持ちこめるのか，それとも文部省なり教育委員会に届け出る義務があるのか，又は管理者の許可を得なければならぬものか，このへんの指示はすこぶる不明確である。そのことが体制の内と外とを問わず教師として最初にひっかかる問題である。それを解決せずに逃避しようとすれば，検定教科書一本槍ということに必然的になるのであり，さらには教科書採択に際しての大地域制ということになる。検定教科書の功罪をいまここでのべるつもりはないが，どうしても味気なさをともなうのは，教師が教える機械でなくて生きた人間である証左であるからではないだろうか。

わたしたちの国語科ではかなり自由な試みをここ数年来実行してきている。その要点を言えば，検定教科書だけに頼らないこと，生徒にとって良い教材とは何かを考え求め見出すこと，偏向をさけて国語の実力を増進させる配慮をすること，実力増進を手近に求めて安易な問題集などになるべく頼らないこと，等が基本的な態度と言えるであろう。もちろん十分なことが行われているとはいえないが実例によって報告をしたい。

§　古典乙Ⅰの教科書についての反省

いまここで教科書論をするつもりはないので実際授業で使ってみた感想という形でのべることにする。

教科書が金科玉条にする学習指導要領が総花式・羅列式であることが，最近ではどこの出版社の古典教科書をも殆ど同じ内容のものにしてしまった。したがって各出版社は註，付録に工夫をこらしている。それで特色を出そうというわけであるが，それにしても教育界以外の人が見たら不思議な現象に見えるだろう。出版社に言わせると，それほど教科書の検定はきびしいのだという。ところが有利な企業であるところから，種類はいっこうに減らない。するとゆきつく所は各社ともに許容の範囲内での小異を競い求めることになる。徒然草でいえば，段数にして10～30が普通であろうが実数（収録されてよいと思われる段数は50～80位であろう。かりに50の段が高校一年生に適当と判断されたとしてもそれを全部載せる教科書はない。なぜないのかはおそらく検定基準の特に値段の点でひっかかるのであろう。しかし，実際は徒然草を80段程度まとめたいわゆる副読本用抄本が多用されているので費用の点は問題にならない。（教科書だから安くてうすい本でなければならぬという理由はない。）

さて徒然草はそれで終るのだが，5段やっても終りであり，50段やっても終りである。ということは文学史的に作品を展望させてあるからである。その方針は以下伊勢物語でも古今集でもなんでもそうであってきわめて多種の作品が登場しては消えてゆく。応接にいとまがないほどであって，ある時代のある作品だけの研究に没頭している大学の研究者のゆきかたと正反対である。それは中等教育の特色であるとはいうものの，新米の国語教師ではとてもこなしきれるものではない。もちろん大学新卒生の知識量をはるかに超えている。それにたち向って授業をしつつ学んでゆくのが良い教師というものであろうが，これも現実には教師用指導書という便利なものが活躍している。それはちようど生徒に安易な虎の巻があるのと同じである。安易と言ったが，別に内容がわるい意味ではない。むしろ良すぎるのが最近の傾向である。

さて問題は教師も生徒も独立していないことである。指導書にも，虎の巻にも使う注意は書いてないようである。はじめから頼らせるつもりなのである。非常にうまい使いかたがあれば使った方がよいくらいなのだが，一般に教師は虎の巻を嫌う。そして辞書を引けと言う。高校一年生の場合，勉強時間の多くを占めるのが英単語の辞書引きである。それにさらに漢字，また漢語，古語を引けといっても無理であろう。引くべき語があまりに多すぎるのである。ではどうしたらよいか。それはやはり読みとる主体の確立が根本であろう。読みとることは自力以外にないのだ。そのためのいろいろな参考書はあってもそれは補助であり，ある場合は検証に役立てるものだ。そういう自覚が最初に必要なのであろう。次にその方法であるが，これは高校一年が入門期として適当であるかどうか，と考えて見るのがより具体的であろう。現在の検定教科書によるかぎりでは古典という科目は生徒にとって困難を感じる科目と数えられていると見てよい。（これについては多くの報告があって現代国語に比して難しいという声が目につく。）もちろん教科書は易から難へという編集方針をとっているのだが，なにぶんにも入門の期間も材料も少なすぎるのだ。そして入門単元をおけば，それで古典読解の態度が身につくという浅はかな精神が少なくも教科書にはある。前述の文学史的羅列に入ることを急ぐあまりのことであろうが，これを解決しなければ先へ進めるはずがない。さて高校三年間で読む古典の量は少ない。諸種のジャンルにわたって日本の代表的古典を一わたり（かりにそれが1章ずつであるにしても）眺めることは容易でない。にもかかわらず高校教育は義務教育に準ずる国民的教養の完成段階であることから，国語関係者の意見はともかく要望される古典の種類は多くなるのは必然である。こう上限が定まっては短期間にモリモリつめこむより方法はないことになる。それが虎の巻依存を生む。そこで古典を羅列することへの反省と，技術的には中学段階での古典教育の重視と二つの解決策が考えられ，後者は次第に強化され今回の教科課程改革にも盛りこまれているわけである。

本校では，従来の各学年5単位の国語科授業時数を改めて，1，2年を6単位，3年を5単位に定めて三年実施した。その内訳は

1年	現国…2	古典乙Ⅰ…2
	漢文…1	増加古典…1
2年	現国…2	古典乙Ⅰ…2
	漢文…1	増加古典…1
3年	現国…2	古典乙Ⅱ…2
	漢文…1	

であって，時間数からいって普通であろう。ただ，その内容が現国の時間数の一部短縮と漢文の独立，それに今回の増加古典に特色を持つわけである。この考えかたの根本は特に目新しさをねらったわけでもなく，古典授業時数の不足を感じたからに外ならない。（漢文を独立させているのは，ほぼ同じ理由であり，本校では高校発足以来である。）

一般に，完備した授業を行おうとすれば，

時数の増加を求めるのは理の当然であって，必要とあればいくらでも増すべきだが，高校教育の現状では，国語・数学・英語の三教科が各1時間増すだけでも全体系には大きな影響を与えるから，時間増は国語科だけで軽々しく言うべきではない。今日，ある種の高校では7～8時間の所も見られるが，そういうところは異常と見なしてよいだろう。

従って，わたくしたちは，この増加1時間を無駄にしないようにした。ということは，正規の古典乙Ⅰと一応切りはなして見たのである。この可否はいろいろあろうがともかくそれで出発することになった。

§ 古典教材の授業体系化

すでに述べたように，高校における古典教材は多種多様であって学年別配当といった解決ができるはずのものではない。現在の方向は大づかみに言ってみれば文学史的展望に難易度を加味したものである。そして，重要な入門の段階が付置されている。それはまったく付け加えられているのが現状であって，誰も今の入門教材で入門できたとは，習うほうはもとより教えるほうも思うまい。

この点について，わたしたちは，教育学部国語研究室を中心にして，付属高校・付属中学と三者の協議会を持ち，古典授業の縦の系列化を考えている。その一部は昭和43年11月に公開研究協議会を開いた結果をまとめた〔中学・高校の古典教育について〕金沢大学教育学部，教科教育研究（第2号）に発表されているが，わたしたち高校側の意見は次のような諸点であった。

1. 高校における入門の指導が中学までさげられないものであろうか。できたらもっと時間をかけて古典になじませてゆくのがよいのではないか。
2. たんに中学側に責任を負わせるだけでなく高校でも特に一年生に適した方法・教材が考えられてよいのではないか。
3. 中学・高校の古典教材は現状のままでよいか，根本的再評価が必要ではないか。
4. 文語文の語法に習熟させるための古典授業を考えることが必要である。
5. そのために文語作品の連読ということを授業にとり入れる試みはどうであろうか。

以上のような問題点をあげて参会の各位，また中学・大学の方々に意見をいただいたわけであるが，上記の報告があるからここに再説をさけ，藤田福夫教授の次の図表を転載させていただく。（これは中学・高校を通観した古典授業の形態試案である。）

中学・高校における古典教材取扱上の形式・内容の比率表

中学校	一年	形式中心	内容 30%　形式 70%
	二年		内容 40%　形式 60%
	三年	形式内容併存	各 50%
高校	一年		〃 50%
	二年	内容中心	形式 40%　内容 60%
	三年		形式 30%　内容 70%

さて以上のような，中学・高校の一貫性ということを軸として目下のところ，わたしたちとしては，古典の授業を次のように考えてみる。

A 一年生の目標

(1) 語法の習熟

……教科書　文法副教科書による

(2) 主要古典の概観(1)

……教科書による

(3) 一つの古典作品の内容理解

……特別教材による

(1)と(2)は別箇になる場合もあるが，それは入門期に文法教科書を使用する期間などであって，ふだんは同時に行われるものと考える。漢文は一応別とするが，語法（といっても決して漢文法ではない）の習熟が主要なる目標である。

B 二年生の場合

1. 作品別の語法の特色

……教科書による

2. 主要古典の概観(2)

……　〃　〔文学史副教科書〕

3. 一つの作品の内容理解から思想的位置付け

C 三年生の場合

1. 難解な古典の数種

……乙Ⅱの教科書による

2. 文学史的位置付け

……　〃

3. 受験対策

Cについて，わたしとしては別に意見もあるが，いまは現状をあげておく。現在の大学の入試方法が変革されないかぎり，三年生はいやでも<源氏><蜻蛉日記>等をなるべく多くよまねばならない。そんな必要はあまり認められないのであるが，教材について付記しておくと，従来の古典教科書の教材は，それはそれとして十分に利用しなければならない。ただし，上つ面の知識が羅列されるだけで満足すべきでない。そこで，古典増の時間をその目的にそって運営しなければならないというのが本校の考えかたである。

§ 増加古典の時間をどう利用したか

最近3年間のこの時間の教材を記すと次のようになる。

昭和42年度

一年　平家物語（角川文庫上下）

二年　蘭学事始（岩波文庫）
　　折りたく柴の記（岩波）

昭和43年度

一年　平家物語（角川文庫上）・文法

二年　折りたく柴の記（岩波文庫）
　　大鏡　（　〃　）

昭和44年度

一年　五重塔（岩波文庫）
　　平家物語（角川文庫）

二年　大鏡（岩波文庫）
　　うひ山ぶみ（岩波文庫）

以上のほかに，教科書中の教材を拡充して徒然草抄・枕草子抄等を使用することがあるから，この時間のねらいである一作品の通読はもちろん不可能であるとしても，ほぼその全容を眺めることができるようになる。これらの教材選定にあたっては，わたくしたちの協議によるわけだが，なるべく新しい教材の発掘を，というのが根本方針である。しかし，これにもいろいろの困難がある。わたくしたちは，生徒の既習の知識だけでどれくらいの古典が，どれくらいの速さでよめるかを生徒自身にも知らせたい。むろん，わたくしたちも知りたい。そういう意図があっての速読教材であるから，有名古典で通釈の完備したものはなるべくさけたいのである。生徒が通釈だけ読んでわかったつもりになるのが一番こまることである。そういう教材，たとえば徒然草抄などはこの時間には不適である。だがしかし，実際には平家物語を採用したのは，物語という性質と対象が一年生ということで初心者に適すると判断したわけである。さて教材は作品だけ適当していても，それが教材の形態をそなえて刊行されているとは限らない。文庫本でさえそうした目で眺めるとおどろくほど範囲はせまいのである。これは高校生にとっても，一般読書家にとっても不

幸なことであると痛感する。とくに最近になって刊行される庶民の生活資料などは，非常に興味深いものを持っていながら，高校生が購読して知能欲求をみたすことはとうていできない。例えば現代国語にノンフィクションがあって，コンティキ号漂流記が生徒の興味をよんでいるのなら，池田寛親の船長日記等一連の漂流記物も，それが文語文であるだけにかえって高校生の興味をそそるのではないだろうか。そうした新しい教材を教材化して教育の現場へ常に提供することが望まれる。それがない現在では，かぎられた範囲からえらぶことになってしまってはなはだ不本意であるが，古典教材の前進という声を高めてゆけば解決の方法も出てくるであろう。こうした前向きの姿勢で現在の教科書をふりかえるとそれは全く変りばえのしない定食料理に見えてしまうのである。わたくしたちの選んだ上記の教材のうちでとくにわたくしの体験した範囲で反省記録を以下に記すことにする。

イ 〔蘭学事始〕について

使用テキスト，岩波文庫（本文53ページ）
学年，二年生3クラス

採択の主旨は，福沢諭吉の蘭学事始再版序に詳述されているこの書の価値を年少の生徒に理解させ，勉学の精神を先人の労苦を通じて会得させたいという願いはもとよりであるが，古文がただ文学に限らずこのような記録に多用されている姿を通読することで理解させたいと考えたのである。

授業形式は最初のことでもあり，方針が得られないままにはじめたのであるが，9月下旬に開始して12月上旬まで14時間程で終了した。つまり，最初の時間はテキスト巻末の解説のうち，福沢の再版序文の範読を交えて全体の解説，とくにそのうちターヘル・アナトミア翻訳にとりかかる条は中学校で訳文で読んだ生徒もあろうかと思って記憶をよみがえらせ，または菊地寛の小説を想起することを意図したが，これは少数で問題にならず，結局この中心部にゆきつくまでのやや冗漫なところをやみくもに読むようになった。ただし，それが必要なことであるのは言うまでもない。したがって毎時間5ページ程ずつ，一人あたり約1ページを分担して教卓に立って音読し，特に疑義のある個所について他の生徒が担当者に質すという演習形式になった。その際，あまり細かい語義のせんさくはやらず，特に術語については巻末の註を読むにとどめ，それよりも，主として漢語・和語の訓みに注意を注がせた。正しく訓むことが第一の要件であることはこうしたテキストを使用する際の注意事項の最たるものであろう。たとえば<居を移し><一門戸><邪宗><殊に><漸く><数多>などが誤読の例であるが，こうした誤読は最初の10ページ程をすぎるとぐんと減るものである。慣れと注意力の養われるためであろう。またその頃になると前後の連関から文義を解し得るようになるらしく，是非語釈を必要とするのはわずかの漢語になってしまうので進みかたははかどる。担当者は岩波の古典大系本を参照する者が多かったようであり，これは自己の責任を果す上で当然のことである。この蘭学事始には訳書もあるがそう簡単には見られないので，ほとんど全員が自力または協力読みをやったことになるであろう。教師としてのわたくしは誤りをそのまま見過さないことであり，生徒の質問に応ずることである。もちろん，医学上の知識はないから専門家に将来問うようにすすめるほかはないが，そういうことは生徒の方が心得ていて決して無理な質問を国語教師にしてくることはわたくしの経験ではないものだ。たとえば，平賀源内が登場すれば，そのとき国語の方から解説できるという喜びでわたくしは満足する。さてこの行文は二年生にとって平易ではないのかとわたくしは推察するのであるが，それがかえって効果的であろうと思う。内容を読みとろうとするのが目的である以上，行文の難解さが伴っては途中で投げ出すにきまっている。

この単元の評価はレポートとした。各自長短の感想文を提出したが，内容に感動したという趣旨が極めて多数であった。ことに医学部志望の生徒に決心をかためさせた効果が数名あったのも面白かった。

評価の問題はこうした授業にあって，常に問題であるが，わたくしは随時考えるより仕方がないと思う。その作品に適した形があるであろうと思う。

ロ　〔折りたく柴の記〕について

わたくしの体験したのは前述の〔蘭学事始〕のつづきとして同じ二年生の第三学期であって時間的にやや短かすぎた。この作品は量的に多いので通読することは教室では難しい。翌年度にはもっと時間をかけて試みてもらったが，それでも約3分の1程度であろうか。したがって一作品の通読ではなくなるが，その程度読んであれば読んだことに入れてよいのではないかと思っている。

この書も選んだ主旨は，自伝文学としての優秀さに加えて武士の考えかた，行動様式を概説によるのでなく読みとらせたかったからである。

方法的には前例にならったが今度は部分通釈を加えなければ人物の行動がつかめないことがしばしば起った。とくに最初の数ページが新井白石の祖父・父・白石と登場してわかりにくいところがある。その主な理由は会話にカギがないことであるらしい。生徒の大事な仕事の一つはこのカギを書き入れることであった。また，これは同じ岩波文庫でもルビはつけてない。ついていないだけにかえって注意がゆきとどくようになったが，二年生以下ではどうであろうか。

この作品のよい所は数ページで独立した話にまとまっているから行動を把握するには適当である。生徒にとって武士の生活様式・行動に読みなれてゆくことが問題であるが，それを数話読み重ねてゆくうちに説明を要することもほとんどなくなるようである。

テキスト44ページのあたりを実力テストに出題してみたことがあるが，当然のことではあるが，習わない学年では次の個所は難解であるらしい。

＜さらば 当時は いとまある 身にこそ おはすれ＞＜まれ人をとどめまいらすとも，まいらすべきものもあらじ＞

問題文として提出する長さは十分である筈でも，そこまで読み進んだ者の理解とは程遠いものがあるようだ。

生徒の関心は作中人物の誰が何をしたかをはっきりさせることにとどまって，その評価までは明らかに出てこない傾向があったが，60ページ程読んだ印象はそれなりにあったであろう。この単元の評価は約30ページの範囲を定めて口語訳一点張りとした。この授業の間中図書館には指定参考書として，古典大系本と宮崎氏の釈義を置いておいた。そしてこの授業以後，中央公論社の日本の名著が出た。新井白石の一冊は桑原武夫訳で〔折りたく柴の記〕を収めているのだが，この授業をうけた生徒はこの先をよむとしてどちらを読む率が高いものであろうか。もちろん，岩波文庫本をもう少し読み易くしての話だが。というのも旧版の文庫本の字の大きさ，詰め方は教室には不向きであるからである。

§　〔五重塔〕について

一年生を対象とし，二学期の全期間をあてた。いちばん進んだクラスで全35章のうち其の二十までであって残りの15章は自宅学習とし，考査の範囲は其の三十一から其の三十五までとなった。形式はやはり演習形式で一人一章の分担である。この書の採択の理由は，古典古文と古典漢文の中間をうめる形式を主眼とした。すなわち，漢文の授業において大きな障害は漢字に対する知識のなさである。その漢字の使用度の高い明治文学は漢字，漢語の訓みと語義を考えるのには適当な教材と思われるし，テキストに使った岩波文庫本はルビがほとんどついているので読み易い。だ

が読むことはできても，小説であるため，とくに語義のせんさくが必要になり，それが納得されてはじめて筋の展開，人物の心理が理解される。この作品の漢語の訓みは多彩であるから，それを利用して，字義とそれに対する和語を同時に知る利点もある。とにかく漢字が多く使われていてもそう恐れるに足りないという感じを生徒に持たすことができるであろうと考えた。明治文学史における必読作品の一つとして文学史的に価値を有することは言うまでもない。従来この種の作品で教科書に採録されているのは樋口一葉が多いであろう。さらに北村透谷，などの評論もありうるが，まとまった形として読むことはもちろん教科書では望めない。（五重塔）は其の三十二が暴風雨の条でこれ以下4章を採録してある教科書も以前はあったが最近はあまり見ない。その場合はもちろん，あらすじを前におくことになるが，この形式はあまり効果的とは思われない。作中人物に対するなじみが浅いのである。それが作品理解をもうすめてしまって，生徒はとかく枝葉にとらわれることになりかねない。

さて上記のような意図で読みはじめ，はじめに漢字，漢語の訓みを分類して見せた。

1. 難読漢語（漢音又は呉音による音訓み）
2. 漢語に対する和語のあて訓み
3. 作品中の特殊訓み
4. 宛字訓み，戯訓

2が多く，（木理，もくめ）（烏黒，まっくろ）（正然，ちやんと）（御情，おこころ）の類である。3は同じ字でも場所によって異なるものが目につく。良人（うち，うちのひと）また，同じ和語に訓んで用字の異なるものもこれにふくまれるであろう。

（をとこ，僮僕，僕人，寺僕）

分類はあまり細かくするとかえって判断がつかなくなるおそれもあり，いまは音，訓の別がはっきりすれば良いと考えたが，3，4については割合理解が早かったようである。

困難点はむしろほかにあった。いわば特殊語彙ともいうべきもので，術語，仏教語，調度類の名称等である。たとえば，槻桐の長火鉢とあっても，長火鉢を見たことのある生徒がクラスの約1割という実態では説明するにも骨が折れる。かえって近い昔の諸道具が今では知り難いのではなかろうか。図鑑類を見ても，この辺がちようど盲点になっているから調べようがない。服飾も同様でこれらの語は調べてくる生徒もあるが，調べる方法が立たない生徒が多かった。広辞苑程度の辞書にないとお手あげということになる。茶道関係，建築関係それぞれ専門の辞典にあたる生徒はかぎられてくるが，その方法を示しておくことにした。特に仏教語の場合は大きい仏教辞典を引いた場合，説明に幻惑されることがあって本旨がわからなく例もある。これらは実際に教室で辞書の語義をどの程度に文脈に生かすかを一緒に考えて進んだ。

作品としての把握は，人物の性格を次第に明らかにすることに中心をおいた。其の一からはじまる（お吉）の描写はなかなか生徒にわかりにくく，（お吉）がとらえられるのは，（お浪）が登場して後であろう。したがって筋の展開は各自まとめさせることにしてとくに教室で討論するようなことはなかった。考査終了後，この作品のまとめを討論する時間を持った。教室では結局，細かく読んで，語句の句読を明らかにし，語義について判然とせぬものをつきとめ，作品味読の基礎作業をやったことになる。そして教室で読めなかった残りを自分で読み，最後のクライマックスを考査範囲としたわけである。考査の際は，テキスト持参を許したので，主力をそそいできた訓みは出題せず，語句の意味と人物論を書かせた。これは，源太，十兵衛，お吉，お浪の主要人物4名の中から1名について書かせることにした。それぞれにかなり詳細な論評が見られ，作者露伴の意図を理解せんとする姿勢が見られた。語句の一例は＜西より瞻れば飛檐或時業月を吐き＞，＜真底我折って＞等の意味を問うたのである。また，〔其の

三十二で作者の言いたいことがあるとすればそれはどんなことか〕という問を出したが約半数の者が作者露伴の文明批評の態度に結びつけて答えた。この考査後，討論形式で批評の時間を持ったわけである。

§ 授業形態その他について

以上の体験を通して得られた結果をまとめて見たい。

1. 授業形態は演習形式になってしまったがそれが最善とはいえないであろう。教授者の独演でもだめであろう。適当に混ずることが理想的と考えられる。ただし，よい生徒が担当した場合は非常に効果があり，指導者の助言も生きてきて面白い。一般的に考えてみると，グループ学習に落着くのかもしれない。ともかく，形態は重要な要素である。一年生の平家物語において，小督の事の条を教育者が音読するだけで，その章の鑑賞に入ったという例を他の先生が報告しているが，十分に考えられることである。
2. テキストの選定について，生徒側の意見を徴していないが，これも将来は考慮されてよいことである。げんに，ある高校では現代国語にそうした希望テキスト別のグループ編成をして授業をするというプランが立てられている。古典の場合，生徒に選択の知識はなかろうから，内容別に分類して希望調査をするのも一方法である。その場合は，現代国語とほぼ同じく，フィクションのノンフィクションに大別して，フィクションばかりに偏らぬ選択が必要だと思われる。
3. 評価の問題も重要である。レポート，試験どれも考えられるが，レポートなどはあまり大きなものを要求しないようにするのが他教科との関連で必要であろう。試験の方法は作品によって異なるのであろう。一般に範囲が多くなって，細部まで記憶することは不可能であることを注意すべきである。わたくしの場合は，大体のやりかたを生徒に予告することにしていた。
4. このような方法に対しての批判はいろいろあるであろうが，その最も大きなものは精読の態度をみだし，細部の鑑賞，分析ができないということであろう。例えば，語法の重要個所が全員に徹底しない，聞きおとしの個所が多く出る。関心の薄い生徒は全然枠外に出てしまうという心配がおこるわけであるが，文法上の疑義も1ページに1つくらいは出てくるものであるし，けっこう実際の練習ケースになってよいと考えている。まとめて言えば，案外にうまくゆくと思われる。ただし，ペーパーテストをすれば，古典教科書の考査よりは成績はわるくなるのが当然である。それ故，方法的には両者の併立がのぞましいのである。ことに細部の鑑賞は，作品の全貌をつかんだときの方がまさるようである。

§ お わ り に

以上の報告を，数的に表現すればよいのだが，それを怠ったため，感想の羅列になってしまったようである。もっと細かいデータを今後貯えてゆきたいと思っている。とにかく本校の実態の一部を記してみた。ゆらい，英語科などでは，速読教材を採用しているところが多く，またその多くが自宅学習であって，科目の性質上それで効果をあげている例をきくが，国語科ではなかなか自宅で独習というわけにもゆかない。単なる速読教材とした場合，目だけで読破して，大まかな印象しか残していないことが多い。それ故，教室でとりあげ，他人と共同して読んでゆくうちに細かい点に注目させてゆくことができると考えてこの方法を採用したわけである。いろいろと今後の問題点が考えられるがそれはまた次の機会に報告したいと思っている。

〔参　考　資　料〕

★〔蘭学事始〕感想文

I　　2B　福光松太郎

杉田玄白翁がターヘルアナトミアの翻訳を完成することのできた主なる原因は，まず第一に科学者の未知の事柄に対する大きな好奇心であろう。以後の医学のためになるのでと翁は書いている。もちろんこの様な主旨で行ったのだろうがその前に翁の意識していなかったかもしれぬが，一番最初にはこの好奇心というものが先に立ったに違いない。翁の本業である官医を勤めながら，また千住骨ケ原などでの腑分を見て，なぜ漢よりの千古の説と違うのであろうか，中国と日本では人間の構造が違うのであろうかなどと思ったことがすなわち蘭書翻訳の原動力となったのである。

翁は同志の者と，艫舵なき船の大海に乗り出せしが如くにこのターヘルアナトミアに立ち向った。ここで私の思うには，翁はウヲールデンブックなるものもない時代に外国の医学書を訳しているのであるが，私たちは中学校入学以来五年ほどの間英語を学んできているのに，本を訳すどころか満足に読めもしないしましてや会話も出来ない現状である。これは一体どうした事か。玄白翁がターヘルアナトミアを翻訳することが出来たのは前に述べたように好奇心が第一に原因しているのである。だから中学3年間の基礎はいざしらず，高校に入ってつまらない教材ばかりを取り上げているのは，興味の湧かない対象に熱中できないのと同じことでそのような教材ではあまり勉強にもならぬと思う。個人の趣味に合わせて科学なら科学の随筆や解説など，読んで知識の得られるようなものを勉強すればよいと思う。

翁が翻訳する場面を描いている所に，フルヘッヘンドなる意味難解な語句が出て来て，その言葉の使ってある2，3の例文から推量してみごとに訳している所がある。この言葉は一例にすぎずもっともっと考えにくくて他の同志が想像してもわからない語句で，この玄白翁が考えて訳せたというような語句があったに相違ないと私は思う。というのは，この蘭学事始を読み進んで行く間に自然と私の頭の中のスクリーンに玄白翁のイメージが投影されたからである。そのイメージというのはどんなものかと言えば，それは私に彼の83という齢を全然感じさせないものであり，子供たちが発想力豊かであるように，実に柔軟な頭脳を有している。私のイメージと実在した玄白翁はこの点で必ずや一致するにちがいない。そしてターヘルアナトミアの翻訳を完成させた第二の原因，原動力はまさしくこの柔軟な頭脳にほかならないと確信する。言語についてだけでなくもちろん科学も，また文化も，自分の棲息する環境と異質のものを新しく取り入れる時に，自由自在に適応する頭脳は必要かつ不可欠であろう。

私のイメージはこの他に前に書いた好奇心とまた合理主義をもっている。たぶん玄白翁もたいへん合理的な人であったのだろう。これは翻訳のさいの推論の進め方やこの本の文脈のリズムや文体などから思いつくものである。この合理的な考えの進め方で翻訳を進めたのであろう。これが第三の原因，原動力でるあ。

玄白翁のまわりに登場する人物の中には，非常にまじめに研究する人や蘭学に熱中して本業を怠る人やユニークな行動をとる平賀源内などさまざまな人物がいる。このような新謝代謝の激しい環境も翻訳を進めた力であっただろう。

この蘭学事始を読んで私が一番強く感じたことは，私の母国語である日本語の難解さと私の日本語に対する無知である。私に対しては玄白翁の書いた蘭学事始がターヘルアナトミアにも思えた。

II　　2C 常山輝夫

僕達は今，大学へ入るためとか，そして将来社会の良い地位につき人々からやったなあと認めてもらいたいとか，社会が複雑し多様に分化したため専門の技術なり知識なりを体得しておくべきだとか，他人と議論しても一挙に相手を粉砕してしまう様な弁術を持ち他人より上にいたいとか，ただ好きだからという様な目的で勉強して居る様に思います。まったくもっともな事だと思います。しかし人間としてそれで良いのでしょうか。この世に出て来て自分だけが良くなる，自分だけの完成をめざして苦労し一個の人間になる。それで良いでしょうか。人間は社会的動物だと言われていますが，社会の中で自分だけがうまくゆけば……，それではだめだと思います。何故かと問われても難しくてわかりませんが。

それについて，本文に出て来る玄白はりっぱだと思います。何故なら自分のためだけにやったのではないからです。本文中に「なにとぞ生民広済のために思い立ちて云々」とあるように。

玄白等が成し遂げたことが人々のために如何なる功績を残したかを考えて見に誠に偉大な事です。彼等は何故これ等の苦行を遂行し得たのでしょうか。それは，人々のためにと言う自信に満ちた確固たる信念があったからだと思います。そしてそれが完成した時，目標としていたものがみごとに人民を救ったと言う事，人々のためになったという事により，より輝き，世間からりっぱだと認められたのだと思います。本文の最後には「かへすがへす翁は殊に喜ぶ，この道開けなば千百年の後々の医家真術を得て，生民救済の洪益あるべしと，手足無踏省躍に堪へざるところなり。」とあります様に，その様な目的をもって完成した時の喜びと言うものはまったく手足無踏省躍に堪へることが出来ないような大きなものだろうと思います。心の底から人のために尽した時の満足は最高だと思います。

又，本文の最後に「伏して考ふるに，その実は恭く太平余化より出でしところなり。世に篤好厚志の人ありとも，いづくんぞ戦乱戈の間にしてこれを創建し，この盛挙に及ぶの暇あらんや。」と書かれています。もしそれが事実とすれば恐しい事だと思います。人間，どん底に陥ったら理想も夢もふっ飛んでしまうかと考えると人間の弱さがさらけ出された様な感じがして，残念でもあり，恐ろしいのです。

「集り来りたる者の内にも，その業はかばかしからず，それと突き留めもなき面倒なることゆえ，遂に精力尽きはて，または今日の生計に逐わるる人はそのしるし見えざるに倦み，且つは己むを得ず中道にして廃するといへる族も多かりき。」又「浮華の輩雷同して従事せしも多かれども，創業の汗遠なるに倦みて廃するもの少なからざりしに。」ということだったそうですが，今も昔も，根性がないと言うことでは同じではないでしょうか。現在の人々と昔の人々とを学問について考えて見ると，現代人には多種の学問の必要性があるけれども，昔は武士の子なら漢学を主として学べばよいから，その面だけを考えると僕達の方が負担が大きいと思います。

これを学んで見て，難しい漢字が出てきたのはよかったと思う。恥をかくのはつらいけれど，それは問題外だと思います。

III　　2C 浜田　博

はじめのころは，ただ目で文字を追うだけで，時々でてくるやや難解な漢字が読めるか読めないか，といった具合で，要旨把握などには及びもしなかった。しかし，慣れるに従って，読みばかりでなく，読みとる，ことにも頭がまわるようになり，それにつれて，興味もわき，おもしろさも感じられた。それには，この文章が源氏物語・徒然草といったよ

うなものとも感じを異にし，古語も少なく，ほとんど辞書なしで読みとれる程度のものであったことも原因する。

それでは，内容に関しての感想をあげてみよう。

蘭書を一書でも翻訳できれば，大きな国益となることが見えているのだけれども，その実行しがたきを嘆息するやら慨嘆するやら，なんとはがゆかったことであろう。十分に察せられる。なにしろ上戸と下戸にあたるオランダ語一つ問うのにも膨大な時間を要し，やっと骨折の治療ができ，寒暖計のごときに心を動かし感服していた時代だから，無理もないところである。

また，この書には興味深いところがいろいろある。たとえば，上戸と下戸をオランダ語に，フルヘッヘンドを日本語に訳する過程における理屈のつけかたなど，なかなかうまくやったな，と感じた。『刺絡の術を見せるのに血が飛び出て落下する位置を予測して器をおいたところ丁度うまくはいった。』今から思えば，ばからしく思うところである。そのほか当時は観臓の場たるものがあったこと，腑分の進行状況なども，興味深く読んだ。

文体のほうでは，漢語の使い方・比喩引用のうまさが往々にしてみられる。たとえば『千里一契』『白駒の隙過ぐる』徐々に理解できるようになったのを『蔗を嚙むが如く』『濫觴』など，玄白の博識ぶりが，十二分に発揮されている感じである。

さらに，書写していて鶏鳴に及んだことや，ターヘルアナトミアを読むのに，たった一行を，日が暮れるまで考え詰めたことなどからには，根気強さも玄白備わっていたことが読みとれる。たしかに，根気強さがなければ，解体新書など，とうてい完成されなかったであろう。根気のほか，決断力，類推力，なども，かね備えていたようである。

しかしながら，このような力をもって，国益となるような大仕事に，労力を惜しみなく費やしていたにもかかわらず，玄白の生計は解体新書という偉大なる書物を出版するに到っても，苦しかったようだ。当時の世人には価値があるのかないのかもわからなかったろうから，しかたのないことかもしれないが。しかし，玄白にしてみれば，その書が，世の医者の諸術発明に役立てば，また，蘭学が世間一般の人に広まれば，富などに比較できない満足を得ていたことであろう。ぼくも，そのような生きかたをしたいとは思うが，現在の社会情勢では，富を考えずに世につくす，なんてことはできないであろう。どうしても富が先行せざるを得ないのではなかろうか。

まとめとして，作者玄白が，オランダ医学研究に関する，いろいろな苦労，その他のことを事実に即して，この蘭学事始として書きしるしておいたことに感謝する。また，大きくみれば，才ある杉田玄白なる人が，蘭学のはやりがけのころに生き，83才もの天寿を全うしたという天命にもありがたく思う。現に，それによって，医学の基礎たるものができたのだから。また，後世のぼくたちが，それによって，多少なりとも，その当時の事実にふれることができたのだから。

ぼくたちには，もっとこのような本に近づいて，受験のための知識でなく，幅広い一般的知識を身につけることが必要なのではなかろうか。